

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02635

研究課題名（和文）スクール・ベースト・アプローチによる学校体育のカリキュラム評価に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Curriculum Assessment of Physical Education by School Based Approach

研究代表者

丸山 真司（MARUYAMA, Shinji）

日本福祉大学・教育・心理学部・教授

研究者番号：10157414

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は主として以下の4点である。第1に、体育カリキュラム評価研究の前提となる戦後日本の実践を基盤にした体育カリキュラム研究の成果と課題が引き出された。第2に、実践を基盤にした体育カリキュラム評価の基本単位としての年間計画を評価するポイントが明らかにされた。第3に、体育教師のカリキュラムづくりに向かう「実践的認識」の形成・変容に関わる研究から学校現場で教師たちが体育カリキュラムを実践ベースでチェック（評価）すべき8つのポイントが導出された。第4に、ペルーのナショナル・カリキュラムの実践化をめぐる体育教師の評価方法の重要な構成要素が明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

カリキュラム研究の国際動向においてスクール・ベースト・アプローチによるカリキュラム評価の開発研究は重要課題になっており、教科教育学においても授業実践を基盤にした教師による教科カリキュラム開発が重要な課題となっている。その中でカリキュラム・アセスメントの問題が未開拓な現状にある。

本研究は具体的な体育実践の事例分析から「単元・年間計画・カリキュラム」の関係や構造の評価方法を教師と共同するアクション・リサーチによって解明しようとする点と、日本・ドイツ・ペルーの比較検討を行うことで国際的に適用できる学校体育カリキュラム評価方法を解明しようとした点に本研究の独自性と創造性があり、学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The results of this study are mainly four points. First, the results and tasks of practice-based physical education curriculum research in postwar Japan, which is the premise for physical education curriculum evaluation research, were revealed. Second, the points for evaluating the annual teaching plan as the basic unit of practice-based physical education curriculum evaluation were clarified. Third, based on the research on the formation of PE teachers' "practical awareness" toward curriculum development, eight points that teachers should check the PE curriculum practice at school were clarified. Fourth, the important components of the evaluation method of PE teachers regarding the implementation of the National Curriculum of Physical Education in Peru were identified.

研究分野：体育科教育学

キーワード：体育カリキュラム スクール・ベースト・アプローチ カリキュラム評価方法 年間計画 「実践的認識」の形成 変容

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年のカリキュラム研究の国際動向として、実践現場で教師が協働して参加するカリキュラム開発のダイナミズムの解明を目指すスクール・ベースト・カリキュラム開発(以下、SBCD)研究が進められるようになってきた。また、近年の教科教育学研究においても実践主体としての教師に着目し、授業をカリキュラムの全体構造の中に位置づけて、授業実践を基盤にした教師による教科カリキュラム開発の研究が重要な課題となっている。さらに、教育政策の動向として平成29年3月に学習指導要領が改訂され、将来の社会を切り開くための資質・能力の育成と「主体的・対話的で深い学び」の充実のために「各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立」が重視されるようになった。その中でとりわけ教育課程の実施状況を評価して改善を図っていくことが学校現場においても重要な課題として取り上げられるようになった。

これまで筆者は、実践を基盤にした教師による体育カリキュラム開発研究を科研費での研究を中心に10年余に渡って進めてきた(平成20年度~30年度にかけて3つの基盤研究(C)を実施)。一方で、SBCD研究においてカリキュラム・アセスメントの問題が未開拓なまま残されており、同様に筆者の研究においても教師による体育カリキュラム実践をどのように評価すべきかというカリキュラム評価研究が残された課題となっていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、実践を基盤にした学校体育のカリキュラム開発プロセスにおいて教師がカリキュラムをどのように評価し、またその評価結果をカリキュラム開発や授業実践にどのように活用すべきかというカリキュラムの評価方法をスクール・ベースト・アプローチによって明らかにし、学校体育のカリキュラム評価方法モデルを構築することであった。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために、本研究では3つの研究課題領域とそれに対応する具体的な作業課題および研究アプローチを設定して研究を進めた。第1の研究課題領域は「実践を基盤にした学校体育カリキュラム評価の状況分析と理論仮説の設計」であり、ここではカリキュラムに関わる国内外の先行研究の検討から学校体育カリキュラムの効果検証のデザインや評価方法についての理論仮説を引き出すことである。第2の研究課題領域は「体育実践における『単元年間計画カリキュラム』をつなぐ関係と内実の評価」であり、体育実践の中で「単元年間計画カリキュラム」をつなぐ「目標 内容 方法 評価」の関係とその内実を分析するとともに、優れた体育実践を展開している体育教師の事例から教師のカリキュラム評価に対する意識・認識を把握し、教師自身がカリキュラムを評価する具体的な方法を引き出すことである。第3の研究課題領域は「学校体育におけるカリキュラム評価方法の理論的解明とモデルの創出」であり、ここではドイツの体育カリキュラム評価方法モデルの検討と学校体育発展途上国のペルーにおける体育実践を基盤にしたカリキュラム評価の比較事例分析を行いつつ、国際指標に耐えうるカリキュラム評価方法のモデルを創出することであった。

4. 研究成果

本研究では大きく分けて以下の4つの側面から成果が引き出された。

(1) 戦後日本の実践を基盤にした体育カリキュラム研究の評価

体育カリキュラム評価研究の前提として、戦後の体育カリキュラム研究の成果と課題を把握することは重要な作業になる。この研究成果は日本体育科教育学会編(2021)『体育科教育学ハンドブック』(大修館書店)の「第3部第1章 教育課程・カリキュラム研究」にまとめられている。ここではまず第1に、1940年代後半~50年代にかけて神奈川県「大田小プラン」(1951-1956)や常陸「太田小実践研究」-「浦和市の体育研究」(1954-1959)など、実践的な「生活体育カリキュラム」研究が華やかに展開され、これらが戦後の実践を基盤にした体育カリキュラム開発研究の先駆けになったと評価できる。第2に、1958年に学習指導要領が告示され法的拘束力を持って以来、日本のカリキュラム開発やカリキュラム研究が停滞し、教師のカリキュラム開発意識・主体性が低下していったと指摘されるように(天野正輝,1993)、体育でもカリキュラム研究が停滞していったと思われる。その中で、90年代後半から民間教育研究団体による実践を基盤にした体育カリキュラム研究も行われるようになり、学校体育研究同志会が学習指導要領のオルタナティブとして運動文化論を基盤にした『体育・健康教育の教育課程試案』(学校体育研究同志会教育課程自主編成プロジェクト編,2003)を教師たちの手によって提起し、また全国体育学習研

研究会も「楽しい体育」論に立脚して小学校から高等学校までの体育実践例を示しながらカリキュラム研究を進めた(2008)。民間教育研究団体である学校体育研究同志会や全国体育学習研究会は依拠する体育教科観は異なるものの、体育における教師のカリキュラム開発意識やカリキュラム研究の停滞という状況の中で、日本の体育カリキュラム研究において実践を基盤にした体育カリキュラム開発(教科論レベルのカリキュラム開発)研究のモデルを提示したという意味は大きいと評価される。第3に、近年の体育カリキュラム研究として、丸山と菊は「体育カリキュラムの社会的構成をめぐる諸相」という観点から体育カリキュラム研究の課題を提起した(岡出美則・友添秀則・松田恵示・近藤智靖編(2015)『新版 体育科教育学の現在』, 創文企画)。同書で岡出は、教科の目標/教科内容の構成/カリキュラム評価/カリキュラムの実態と機能の研究について国内外の研究動向を整理する中でカリキュラム研究の成果と課題を指摘した。さらに、批判的教育学を基礎にした井谷(2013)のカリキュラム・ポリティクスの研究も重要な問題提起をした研究として評価されよう。

(2) 実践を基盤にした体育カリキュラム評価の基本単位としての年間計画 重点教材の評価

カリキュラムづくりの土台は授業(単元)実践であるが、学校現場で授業実践とカリキュラムを結ぶ最も重要な単位は年間計画である。年間計画づくりを教師集団で意識的に取り組むことがカリキュラム開発の重要な課題となる。本研究の研究課題領域(「体育実践における『単元年間計画 カリキュラム』をつなぐ関係と内実の評価」)の課題は、学校体育の「単元 年間計画 カリキュラム」アセスメントのアクション・リサーチによる事例分析であった。

年間計画やカリキュラムを意識して体育実践を展開する優れた教師の事例から明らかになったことの一つは、彼らが大単元授業で年間計画を構成している点である。大単元で年間計画やカリキュラムを構成するということは教師が重点教材や重点内容を構想することであり、それが自身の実践や年間計画に個性をもたらすことになる。そしてどの教師も子どもの実態を把握することから重点教材を設定している。そして第2に、優れた教師が重点教材を構想する際には、子どもの実態を軸に1年間の出口像を描きながら、教科内容の探究、発達課題の教材化、自身が得意で関心がある教材、学校の置かれている状況を考慮するなどの視点から重点にすべき教材を選び、1学期から3学期までのストーリーを描いて年間計画に位置づけていることが明らかになった。第3に、事例分析から年間計画づくりにおいて重視している点、言い換えれば年間計画を評価する際のポイントが明らかになった。それを教師への問いとして示せば、「子どもの事実(願い、訴え)と「できる わかる」過程の実態を把握しているか、「子どもが変わる授業」のイメージを持っているか、「年間を通して子供たちにどんな力をつけるのか(出口像)を構想しているか、そのための視点と方法を持っているか、重点教材化(大単元化)して取り組んでいるか、単元計画はその教材で「なぜ、何を教えるか」を自問自答しているか、ゆとりある教育活動が行える条件整備(職場づくり・学校づくり)をしているか、実践報告という集団検討のフィルターを通して計画しているか、年間計画づくりの背景にある自身の体育観を問うているかであった。

(3) 体育教師のカリキュラムづくりに向かう「実践的認識」の形成 変容からの評価

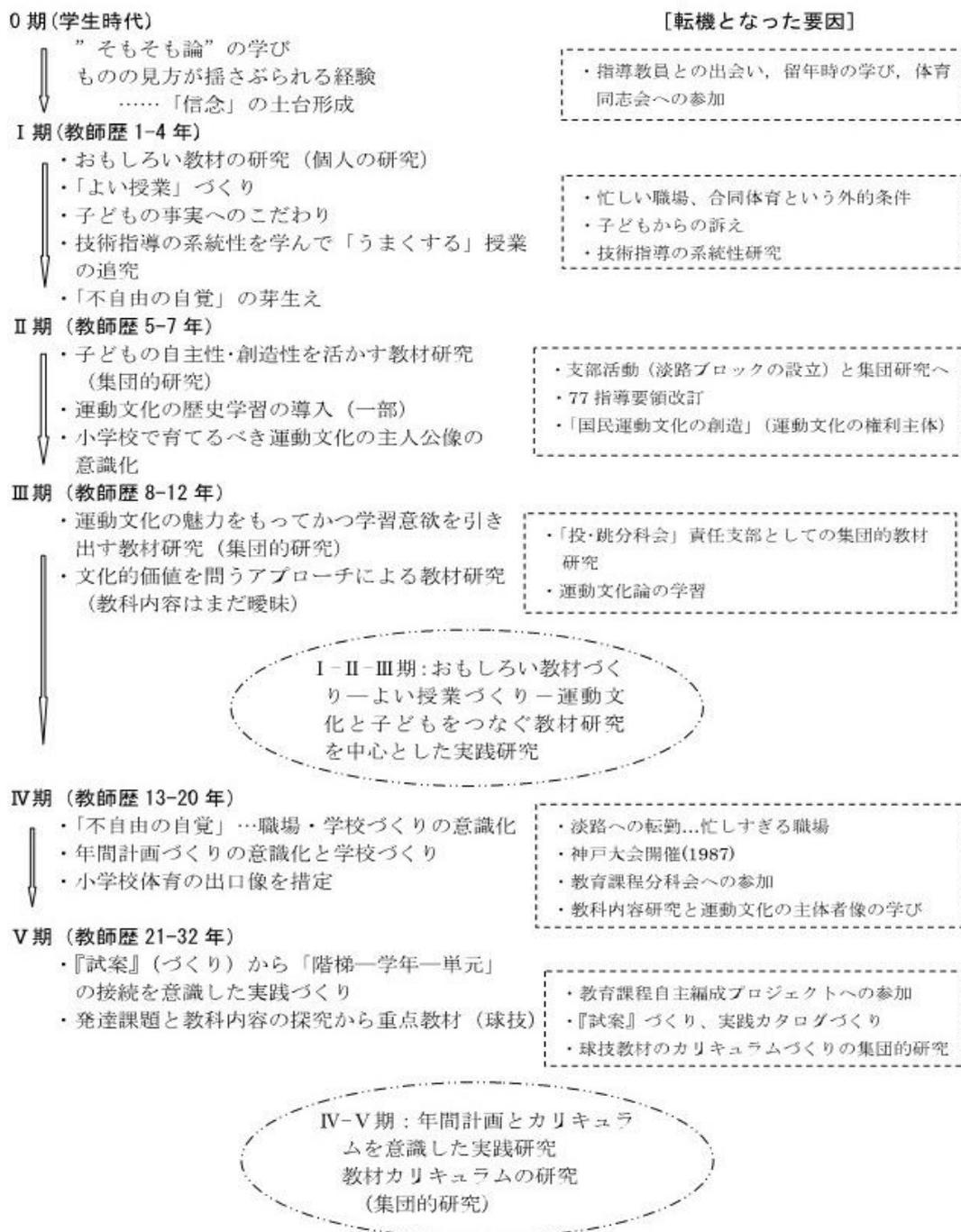
本研究では40年近くに渡って優れた体育実践を継続的に積み上げてきた熟練体育教師(小学校教諭S氏)がこれまでの体育の実践づくりの中でどのような授業やカリキュラムに関わる経験をし、その中でカリキュラムづくりに向かう「実践的認識」をどのように形成 変容してきたのか、その特徴や要因、プロセスを明らかにすること、そしてそこから教師がカリキュラムを創出したり評価するポイントを引き出すことが目的であった(丸山, 2021)。

これまでのS氏の40年近くに及ぶ実践研究史を紐解く(評価する)と、教師はそれぞれの時代において実践づくりに際して固有の思いや悩みを持ち、その克服過程で教師の「実践的認識」が形成され、それがその教師の「こだわり」や信念、実践の個性になっていくこと、そして教師の「実践的認識」や「こだわり」は実践現場において子どもとの格闘の中で、仲間との相互批評の中で、地下水脈のようにつながりながら強固なものとなり、実践を豊かにしていくことが浮かびあがった。S氏の実践の積み重ねの背景には、刺激をくれる人との出会い、よい実践との出会い、集団研究と集団批評で揉まれること、失敗を客観視しポジティブに変える思考、実践への原動力となる不自由の自覚、仲間や同僚性、教師が学び続けることが存在していたと思われる。

S氏の実践研究史は、実践・研究のモチーフを含め 期～ 期に分けられる。 期(教師歴1-4年):「よい授業を」、 期(教師歴5-7年):「子どもたちの自主性・創造性をいかす授業を」、 期(教師歴8-12年):「子どもたちの学習意欲を引きだす教材づくりを」、 期(教師歴13-20年):「学校づくり・教育課程づくりを視野に入れた体育の実践を」、 期(教師歴21-32年):「豊かな内容で、子どもたちをつなぐ体育の教材づくり・授業づくりからカリキュラムづくりへ」、 期(教師歴33-38年): 期の継承・発展期である。 期から 期を評価してみると、 - 期は主としておもしろい教材づくり よい教材づくり 運動文化と子どもをつなぐ教材づくりを中心とした実践研究に重点が置かれ、 ~ 期になると年間計画 カリキュラムを意識した実践研究へと移る(表1)。そしてそこでの教材研究も教材のクロスカリキュラム的な研究になっていったものと考えられる。また、このS氏の実践研究からは、教材づくり 授業づくりか

ら年間計画づくり カリキュラムづくりへと向かう思考過程が進む一方で、年間計画やカリキュラムづくりの意識が形成されると、それとの関係を視野に入れたより深い教材づくりや授業づくりへと進む思考過程が生まれることも明らかにされた。

表1. S氏のカリキュラムづくりに向かう「実践的認識」の形成-変容プロセス(丸山, 2021)



さらに、S 氏のカリキュラムづくりに向かう「実践的認識」の形成-変容プロセスや優れた体育実践・カリキュラム実践を創り上げた教師たちの事例から、以下のような共通するカリキュラムを評価する8つのポイント(チェックポイント)が引き出された。

子どもたちの実態をどのように評価しているか：目の前の子どもの現実把握からスタートすることが年間計画やカリキュラムづくりの第一歩となる。どのような目標(出口)像を描いているか：各階梯で身につけさせたい「体育の学力」を自身の言葉で描くことである。年間計画における各学年のテーマを設定しているか。何を教え(教科内容)どんな教材を準備しているか、重点教材は何か：重点教材の設定 教材の系統化 大単元を構想すること。新年度の最初の体育授業で子どもたちにどのような授業と出会わせるか：4月に子どもたちが最初に出会う「つかみの授業」は年間計画・カリキュラムづくりにおいてきわめて重要である。体育授業と教科外体育(学校行事・部活)をどのように関連づけているか。体育教師集団で毎年年間計画について話し合っているか：体育教師が専門家として育ち合う「同僚性」の構築が重要な

課題である。以上が学校現場で教師たちが体育カリキュラムを実践ベースでチェック(評価)する主なポイントとなることで導出された。

(4) ペルーの学校体育カリキュラム開発と評価

国際指標となる教師による体育のカリキュラム評価指標を引き出すために、ペルーの学校体育のナショナル・カリキュラムにおける教科内容編成に関する研究(2020)をベースにして、さらにドイツの体育教師によるスポーツ指導要領の評価研究(丸山,2008)に依拠しながら、ペルー・アレキパ州の体育教師を対象にしてペルーの学校体育におけるナショナル・カリキュラム(以下、NC)の実践化をめぐるカリキュラム評価についての調査研究(オンライン)を実施した。この研究成果は、久我アレキサンデルとの共同研究(2023)「ペルーの学校体育におけるナショナル・カリキュラムの実践化をめぐるカリキュラム評価の検討」(日本教科教育学会誌、第46巻第3号)としてまとめられた。

その結果、全体的な傾向としてペルーの体育教師はNCを実践の拠り所として位置づけながら積極的にその中身の把握に努めていること、NCの内容に触れる回数や時間等の量的な接触の差異がそのままNCの理解度に反映されること、体育教師のNCの理解度と環境条件が教師のNC評価に影響を与えていることが明らかにされた。そして実践とつながるカリキュラム評価の方法においては、教師のカリキュラムの内実への意識・理解と教師を取り巻く環境条件が重要な構成要素となることが示唆された。

本研究では、日本・ドイツ・ペルーにおける実践を基盤にした体育教師によるカリキュラム評価研究を通して評価方法の国際指標を引き出そうと試みたが、評価方法としての共通項とそれぞれの国の文化・社会・学校状況等の違いによる固有性を考慮する必要性が明らかとなり、本研究では国際指標となりうる学校体育のカリキュラム評価方法モデルを構築するまでには至らなかった。今後の研究課題として残された。

最後に、2018年～2023年度にかけて本研究を遂行してきた。2018年～2020年度には愛知県立大学の副学長となり、大学の管理運営業務にウエイトがかかり研究活動全体が十分に展開できなかった。加えて2019年2月以降から新型コロナウイルス感染症が蔓延し、とりわけ国内・国外(ドイツ)でのフィールドワークが全くできなかった。と同時に2022年度には愛知県立大学を定年退職し、2023年度から日本福祉大学教育・心理学部に赴任して今日に至っている。本研究期間には多くの外的条件が重なり、研究活動が遅延してしまった。一方で、スクール・ベースト・アプローチによる学校体育のカリキュラム評価研究としては上述の研究成果を引き出すことができ、一定の前進があった。この研究成果と課題をベースに、実践を基盤にした体育カリキュラム研究として残された理論的・実践的課題の解明を今後進めていきたい。

<文献>

- ・天野正輝(1993):『教育課程の理論と実践』、樹村書房
- ・全国体育学習研究会編(2008):『「楽しい体育」の豊かな可能性を拓く』、明和出版
- ・学校体育研究同志会教育課程自主編成プロジェクト編(2003):『教師と子どもが創る体育・健康教育の教育課程試案』、創文企画
- ・井谷恵子(2013):『体育カリキュラムに影響を及ぼすローカルレベルのポリティクスに関する研究 まとめ・資料集』、平成22年度～平成24年度科学研究費補助金(基盤研究C(1))研究成果報告書
- ・久我アレキサンデル・丸山真司(2020):「ペルーの学校体育の教科内容編成にみられる特徴および課題 ナショナル・カリキュラムにおける初等・中等体育カリキュラムに着目して」、『日本教科教育学会誌』第43巻第1号、日本教科教育学会、pp.1-11
- ・久我アレキサンデル、丸山真司・加納裕久(2023):「ペルーの学校体育におけるナショナル・カリキュラムの実践化をめぐるカリキュラム評価の検討」、日本教科教育学会誌、第46巻第3号、13-24
- ・丸山真司(2008):「ドイツにおける教師によるスポーツ指導要領の評価」、『日本教科教育学会誌』第30巻第4号、日本教科教育学会、89-98.
- ・丸山真司(2021):「体育教師のカリキュラムづくりに向かう『実践的認識』の形成-変容プロセス 小学校教諭S氏のライフヒストリー・アプローチ」、『愛知県立大学教育福祉学部論集』第69号、57-67
- ・日本体育科教育学会編(2021):『体育科教育学研究ハンドブック』、大修館書店
- ・岡出美則・友添秀則・松田恵示・近藤智靖編(2015):『新版 体育科教育学の現在』、創文企画

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 丸山真司	4. 巻 44(1)
2. 論文標題 運動文化の学びと子ども理解	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 たのしい体育・スポーツ	6. 最初と最後の頁 18-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久我アレキサンデル、丸山真司、加納裕久	4. 巻 46(3)
2. 論文標題 ペルーの学校体育におけるナショナル・カリキュラムの実践化をめぐるカリキュラム評価の検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18993/jcrda.jp.46.3_13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 遠座未菜・丸山真司	4. 巻 第1号
2. 論文標題 カンボジアの幼児教育の歴史と幼稚園教員養成校の課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中部学院大学・中部学院大学短期大学部 教職実践研究	6. 最初と最後の頁 51-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸山真司	4. 巻 第71号
2. 論文標題 運動文化の学びを「ともに生きる」につなぐ体育実践の創造に向けて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 愛知県立大学教育福祉学部論集	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久我アレキサンデル, 丸山真司	4. 巻 第43巻第1号
2. 論文標題 ペルーの学校体育の教科内容編成にみられる特徴および課題 ナショナル・カリキュラムにおける初等・中等体育カリキュラムに着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1508/00004532	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 丸山真司・伊藤嘉人・久我アレキサンデル・植田真帆	4. 巻 第69号
2. 論文標題 体育教師のカリキュラムづくりに向かう「実践的認識」の形成-変容プロセス- 小学校教諭S氏のライフヒストリー・アプローチ-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛知県立大学教育福祉学部論集	6. 最初と最後の頁 57-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸山真司	4. 巻 第67巻第1号
2. 論文標題 「スポーツ文化の主人公」を育てる体育のルール学習	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 12-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久我アレキサンデル, 丸山真司	4. 巻 第38巻第1号
2. 論文標題 重点教材を活かした年間計画を教師が創るー実践分析を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 たのしい体育・スポーツ	6. 最初と最後の頁 48-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 丸山真司
2. 発表標題 多様な背景を持つ人・子どもたちをつなぐ体育・スポーツの力
3. 学会等名 愛知県立大学公開セミナー（県大アゲイン）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 丸山真司
2. 発表標題 スポーツを通して『ともに生きる』社会を（趣旨解説）
3. 学会等名 第12回スポーツ（NPO「体育とスポーツの図書館」主催）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 澤 豊治，丸山真司，植田真帆
2. 発表標題 若手保健体育教員の悩みについての一考察 - 新規採用から6年未満の中学校保健体育教員に着目して
3. 学会等名 日本体育科教育学会第27回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森敏生，丸山真司，石田智巳，玉腰和典
2. 発表標題 体育科教育における学習評価論の課題 - 学習としての評価（assessment as learning）の理論的展開に着目して -
3. 学会等名 日本体育科教育学会第27回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森敏生、丸山真司、石田智巳、玉腰和典
2. 発表標題 体育授業における技術認識と集団関係の変容 - グループ学習の事例を手がかりに -
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第41回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 丸山真司
2. 発表標題 教育としての部活動再考
3. 学会等名 令和3年第2回県立高等学校部活動総合指導員研修(愛知県教育委員会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森敏生、丸山真司、石田智巳、玉腰和典
2. 発表標題 体育授業における技術認識と集団関係の変容 - グループ学習の事例を手がかりに -
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第40回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森敏生、丸山真司、石田智巳、玉腰和典
2. 発表標題 体育授業における学習課題の対象化：学習活動の創発性を視点として
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸山真司
2. 発表標題 体育教師が「年間指導計画-カリキュラム」をつくる意味と方法
3. 学会等名 兵庫県立学校体育主任会（兵庫県教育委員会）（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 日本体育科教育学会編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 148
3. 書名 『体育科教育学研究ハンドブック』（第3部第1章・教育課程・カリキュラム研究を執筆）	

1. 著者名 学校体育研究同志会編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 創文企画	5. 総ページ数 246
3. 書名 『新版 スポーツ主人公を育てる体育・保健の授業づくり』（「単元の書き方 - 教科の背後にある文化的な特性と単元の関係 -」（pp.12-15）, 「授業づくりからカリキュラムづくりへ」（pp.76-79）を執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------